

若者の性とセクシュアリティ教育の現状に関する文献検討 ー保健領域以外の視点からの文献検討ー

The Present Situation of Sexuality among Youth and Sexuality Education :a Literature Review

西頭 知子, 佐々木 くみ子

Tomoko Nishito, Kumiko Sasaki

キーワード: セクシュアリティ教育, 性行動, 性意識, 若者

Key words: sexuality education, sexual behavior, sexual awareness, youth

I. はじめに

性行動の低年齢化が社会的な問題として認識されるようになってから久しい。しかし、若年層の性感染症 (Sexually Transmitted Infections 以下 STI) や HIV (AIDS) の感染者は依然減少には転じておらず、学校や家庭など子どもたちが性に関する正しい知識を得る場がその役割において十分に機能していないことが推測される。

前報 (西頭他, 2011) では、若者の性意識・性行動の現状と日本において実施されている主要なセクシュアリティ教育の現状を明らかにすることを目的に、保健領域における文献検討を行った。結果からは、性行動の場面で女子は受け身で意思決定をしていないこと、男子が優位である性的関係性が構築されており、また、男子は性行動に伴うリスク対処の意識が低いこと、知識をもっているにもかかわらず行動につながないこと等、日本の若者の特徴が示された。セクシュアリティ教育では欧米諸国で開発されてきた健康行動理論に基づく方法が取り入れられていることに関して、エビデンスを積み、日本の文化圏にあった理論を開発することの必要性が示唆された。

セクシュアリティ教育に関する研究は多様な領域において実施されていることから、今回は教育学や社会学を中心とした保健領域以外で実施されている研究についての文献検討を行う。セクシュアリティ教育は、その背景に社会や文化、宗教等あらゆる因子をふくんでいるため、多様な領域における異なった視点からの研究成果やアプローチを知ることにより、より子どもたちの現状にあったものへと発展していくと考える。

II. 目的

教育学・社会学領域を中心とした保健領域以外の文献から、若者の性意識、性行動、セクシュアリティ教育の現状や課題を明らかにし、よりよいセクシュアリティ教育の方向性について検討する。

III. 研究方法

対象文献の抽出は、Cinii (NII 論文情報ナビゲータ) と日本社会学会データベースから過去 10 年 (2001 年～2011 年) のキーワード検索で実施した。キーワードは「セクシュアリティ」「性行動」「性意識」「意

思決定」「自己決定」とした。これらのキーワードは、解剖学的、生理学的内容に偏った狭義の意味の性、あるいは性教育という視点ではなく、人間関係の理解やコミュニケーション能力等を含めた広義の意味のセクシュアリティという視点から決定した。Ciniiにて文献検索した結果、セクシュアリティ 1536 件、性行動 500 件、性意識 537 件、意思決定 4624 件、自己決定 1548 件、セクシュアリティ×性行動 17 件、セクシュアリティ×性意識 7 件、セクシュアリティ×意思決定 1 件、セクシュアリティ×自己決定 13 件、性行動×性意識 97 件、性行動×意思決定 1 件、性行動×自己決定 6 件、性意識×意思決定 1 件、性意識×自己決定 3 件であった。日本社会学会データベースにて文献検索した結果は、セクシュアリティ 12 件、性行動 4 件、性意識 1 件、意思決定 11 件、自己決定 14 件であった。これらの文献のうち、原著論文または研究および論文の体裁を整えており、本研究の目的に則した文献 13 件を選定し対象とした。

IV. 結果

1. 若者の性意識・性行動

1) 性に関する意識

性の悩みについて、「ある」と回答したものは 2 割で、悩みをもっている学生の方が少なかった（山崎, 2010）。悩みの内容は、男子では「性欲」「性交」「マスターベーション」、女子では「月経」「性感染症」「心の悩み」で男女差が見られた。「性交」「月経」「性感染症」は、学習指導要領に指定されているため教育を受けているはずであるが、性の悩みを抱えた時の解決方法にはなっていないことが窺える結果であったと山崎は述べている。また、性交については男女ともに「愛情があればよい」が約半数を占め、特に男子では「避妊すればよい」が約 3 割であり、安易な性行動の実態が窺える結果が示された。

山根らは、質問紙調査の結果から、大学生の性意識について性規範を中心に考察を行った。結果からは、大学生は性規範に関して相対的に寛容であり、特に「性的寛容さ」に関する質問の内、「一晚限りのセックス」と「複数の人との性的関係」では性差がみられ、女性より男性の方が寛容であることが示さ

れた（山根他, 2000）。

土井らが大学 1～2 年生に行った調査では、「高校生の段階でのセックス（性交）は適切でない」という意見に対して「そう思う」と回答した“性交禁止派”が男子 10%、女子 15%、「そうは思わない」「性交容認派”が男子 45%、女子 32%であった。性交の条件としては「愛し合っていれば/お互いの合意があればいい」男子 92%、女子 87%、「結婚、または婚約が条件」男子 4%、女子 7%との結果であり、男女ともに性交に対するハードルが低いことが確認された（土井他, 2008）。

2) 性行動の実際

大学生の性交経験の有無について、今野の調査（今野, 2003a）では約 6 割、山崎の調査（山崎, 2010）では約 7 割、山根の調査（山根, 2000）では女性約 4 割、男性約 5 割が「ある」と回答した。山崎の調査では、高校時代までに約 7 割が性交を経験しており、いずれも低年齢化が窺われる結果が示された。また、大学 1～2 年生を対象にした土井らの調査（土井他, 2008）では、男女とも約半数に性交経験があった。

性交の動機については、男女ともに「好きだから」が最も多く、次いで、男子では「興味があった」「なんとなく」、女子では「相手に求められた」「嫌われたくない」であり、男女差が認められた（山崎, 2010）。

性交の要求に関しては、男子では「どちらからともなく自然に」60%、「自分から」30%、「相手から」10%、女子では「相手から」64%、「どちらからともなく自然に」34%、「自分から」2%であり、男性側に主導権があったことが窺われる結果であった（土井他, 2008）。

性交経験での不安の有無では、約 8 割が「あった」と答えており、内容は「妊娠」（男子 88.2%、女子 88.6%）、「性感染症」（男子 23.5%、女子 31.4%）であった。男女ともに「妊娠」の不安の割合が高く、性感染症を自らの問題と捉える意識が低いことが窺える結果が示された（山崎, 2010）。

性交時に妊娠や性感染症が気になるかについては、対象者（大学 1～2 年生）の 8 割以上（男子 86%、女子 89%）が「非常に」または「多少」気になることと回

答したが、相手との話し合いを「よくする」「時々する」を合わせても男女共に6~7割に過ぎず、共に不安や心配を感じている割には十分に話し合われていない傾向にあることが明らかになった(土井他, 2008)。

3) 避妊に対する意識、避妊行動、避妊方法

今野が大学生を対象に行った調査(今野, 2003a)では、避妊に関する考えについて、「交際相手のことを愛していても、避妊には気をつけたい」との回答が最も多く(83.8%)、「相手が誰であっても避妊はすべき」(77.4%)、「相手が消極的であれば説得して避妊する」(68.3%)など、相手との人間関係を大切にしたい上で避妊行動を選択しており、避妊に対して積極的な様子が窺われる結果が報告された。しかし一方では、「交際相手が積極的(あるいは協力的)であれば避妊する」(67.9%)、「避妊具がなければそのまま避妊せず性交する」(25.4%)、「予期しない性交では避妊まで気がまわらない」(18.2%)など、相手本位や場当たり的な避妊行動をとっており、確実な避妊行動を選択することの難しさを感じ取る結果(今野, 2003a)も示された。河野、山崎の報告からも同様に、避妊を実行している率は高いものの、毎回確実に実行しているわけではないことが示された(河野他, 2009、山崎, 2010)。

用いている避妊方法は「コンドーム」が6~9割でもっとも多く、次いで「膣外射精」(1~3割)が挙げられた(今野, 2003a、山崎, 2010、山根他, 2000)。避妊方法は主にコンドームのみに頼っている状況で、男性に主導権をゆだねがちになる方法が選ばれていることが示された(山根他, 2000)。また、避妊をどちらから言い出すかを尋ねた結果、「自分」女性20.8%、男性48.1%、であり、女性の方が男性よりも有意に割合が低かった。避妊の方法の選択と同様に、男性側の意志が避妊の実施においてより強く影響していることが窺えることが示された(山根他, 2000)。

4) 性に関する知識と情報源

避妊に関する知識について、今野の調査(今野, 2003a)では、男女ともほとんどが正しく把握(8割~9割以上)しており、情報源は「学校」が最も多かった。山崎の調査(山崎, 2010)でも、避妊につ

いてほぼ全員が学習していたが、知識は乏しく、方法について詳しく知りたいと思っていることが明らかになったと述べられている。また、妊娠成立のしくみについてもほぼ全員が学習していたが、3~4割の学生しか正しい知識を持っていない実態が明らかになり、特に男子の知識があいまいであることが示された(山崎, 2010)。

5) 性行動や性意識に影響を及ぼすもの

施が高校2年生に行った調査(施, 2003)では、日常生活に対する退屈感「毎日がたいくつでつまらない」、徒労感「まじめに努力しても報われない」、虚無感「世の中はお金がすべてだ」、享楽感「今が楽しければそれでいい」、の強い者に性交経験者や初交年齢の低いものが多く、また、性交を「快楽」「ストレス解消」「征服欲を満たすもの」と考える傾向が高いことも明らかになった。これらの結果から施は、日常生活の退屈さや将来の行先き不安を紛らわすためにはストレスを解消し、快楽を提供し、現実では無力である自分に達成感を与えてくれる(=征服欲)ものとして、セックスが用いられており、彼らの日常生活の意義や自己肯定感にはセックスが大変重要な役割を果たしていると考えられている。また、施は同調査において、人間関係と性行動・性意識についても検討している。その結果では、友人関係が楽しくないと思っている者ほど初交年齢が低く、性交経験人数が多かった。さらに、人間関係が楽しくないと思う者ほど、セックスを快楽を得るものとする傾向が強く、また、「愛のないセックス」「金銭がらみのセックス」「恋人以外の人とのセックス」を受容する傾向が強い。特に、家庭が楽しくないと思う者ほど、性・セックスを「快楽を得るもの」「ストレスを解消するもの」「征服欲を満たすもの」と考える傾向が強いことが確認された。施は、これらの結果から青少年にいかにして「居場所」を提供し、またいかにして「努力すれば報われる」社会システムを構築するかが社会全体の課題であると考察している。

6) 性的逸脱行動の背景要因

櫻庭らは、『援助交際』を現代女子青年の性的逸脱行動として捉え、15~18歳の女子高生を対象とした質問紙調査により、その背景要因を明らかにした(櫻

庭他, 2001)。結果から、家庭環境と性意識が『援助交際』の態度に直接影響を与えていることが明らかになった。特に、「寂しさを埋め合わせるため他者との関わりを求める傾向」、「流行に追従する意識」、「金銭を最優先に考える傾向」、「自分以外への関心の欠如」、などの現代青年に特徴的とされる心性が『援助交際』に直接影響を与えていることが示された。

7) 精神的健康状態と喫煙・飲酒・性行動との関連

河野らは、大学における健康教育の手掛かりを得ることを目的に、大学1年生(20歳以下)の精神健康度と喫煙・飲酒・性行動との関連を調査・検討した(河野他, 2009)。精神健康度を調査する日本版GHQ (General Health Questionnaire) の結果、男子の精神不健康率 41.6%、女子の精神不健康率 36.2%で、男女間に有意差はなかった。GHQ と喫煙・飲酒・性行動の関連については、非精神不健康群と精神不健康群の2群において比較検討が行われたが、いずれの項目においても有意差は認められず、GHQ と喫煙・飲酒・性交経験との関連はみられなかった。

喫煙・飲酒・性行動の関連については、男子で喫煙と飲酒・性行動の関連が示された。飲酒をしない群の喫煙率(3.3%)は習慣飲酒群(3日に1回飲酒)(42.8%)より有意に低く、また、性交経験がない群の喫煙率(3.2%)は、性交経験がある群の喫煙率(17.5%)より有意に低かった。性交経験と飲酒との関連では、男子では性交経験がない群の飲酒率(46.5%)は、性交経験がある群の飲酒率(80.0%)より有意に低かった。女子においても同様に、性交経験がない群の飲酒率(36.7%)は、経験がある群の飲酒率(73.7%)より有意に低く、関連が示される結果であった。

8) 性的自己決定と性経験の関連性

田原は、若者に求められている「性的自己決定」を測定するための尺度を作成し、性経験の有無が、性的自己決定に関係があるかどうかについて検討した。結果から、性的自己決定尺度は、「性の多様性」「性の自己受容」「性の解放性」「性の健康と権利」の4因子構造からなり、性的自己決定にはこれら4つの要素が大きく関係していると考えられる事が示された。

性経験の有無と性的自己決定について検討した結果、「性の多様性」、「性の解放性」の2点において性経験の有無が関連していた。性的自己決定を高めるためには、自己の性について性役割にとらわれず、多面的な存在としてとらえ、性について他者と語り合える関係、理解しあえる関係を築いていくことが重要である、と述べられている。

2. 親の性意識が性教育に及ぼす影響

高橋は、父親と母親のセックス観が性教育に及ぼす影響を分析した(高橋, 2003)。結果から、「セックスは愛情確認の手段」(父親 43.3%、母親 25.0%)、「セックスは楽しい」(父親 42.2%、母親 14.7%)と捉えている者には、「セックスは大切」と考える者が多く、各項目間で関連がみられた。また、禁欲的なセックス観は性に関する会話への抵抗感を強め、性教育実践を抑制する作用をもつことが明らかになり、特に母親の場合は禁欲の必要性が男性による女性の道具視などの否定的セックス観と結びついていることから、夫婦間のコミュニケーション不足の問題が指摘された。親子間で性に関して気軽に話し合える関係をつくるには、夫婦が性に関して率直に話し合える関係であることの必要性が指摘された。

性に関する会話に抵抗感をもつ父母は半数程度、子どもとテレビ視聴時のラブシーン場面での態度について、平静という者は半数以上であった。この結果を高橋は、性に関する話題への抵抗感は一般に予想されているほど強くなく、視覚的性情報に対する忌避感も確実に低下していると評価している。このことから、性に関する会話と映像に対する抵抗感や羞恥心、タブー意識を、越え難い障壁とする固定的な観念から抜け出し、性教育を家庭教育の主要課題の一つととらえて取り組むべき時機にきているとの考えが述べられた。

性教育の必要性の意識については、性の身体的・生理的な事柄や科学的な知識は学校で、男女交際や恋愛、夫婦の協力や親の役割など社会的・心理的な事柄は主に家庭でと考えていることが示された。このことから、親は性教育において、学校と家庭の役割の違いと連携を意識していると言える考察され

ている。また、父母ともに「家庭での性教育の必要性の意識」と「家庭における性教育の実践」との間に関連が認められたことより、家庭で性教育への取り組みを活性化させるには、性教育を必要とする意識を高め動機づけることが重要であると述べられている。

3. 性教育の方向性

山崎らは、妊娠が自身に起こる女子に比べ男子は知識があいまいであることから、特に男子において性に関する基本的な教育が必要であることを指摘している。また、学校での教育が性の悩みの解決につながっていないことから、発達段階を理解し、個人差を考慮した正しい知識を提供することや性の悩みや不安を抱えたときの対処行動を獲得する等の教育が必要であること、さらに性行動が早期化している現状をふまえ、性行動が活発化しはじめる中学校での性教育が重要である、との考えを示している（山崎, 2010）。

田原は、従来の性教育の不十分な点を改善し、性的自己決定力を高めるための、独自の性教育プログラムを開発・実施し、その効果を検証した（田原, 2011）。プログラムは、「デートDV」、「性感染症・避妊と中絶」、「性的マイノリティ」の3つのテーマからなり、大学生・大学院生をファシリテーターとしたピアグループディスカッションが取り入れられた。プログラム受講後のアンケート調査からは、「性の解放性」が実施前に比して高く示されており、ディスカッションの効果として、性を語ることにするためのらいや恥の意識が薄れていった可能性が指摘された。

今野は大学生の性意識・性行動に関する調査結果から性教育の方向性を検討し、①安易な性交、②不確実な避妊、の2点を課題として明らかにした（今野他, 2003b）。これらから「人間関係形成のためのひとつの手段として性をとらえる性教育」「豊かで安全な性行動をとることができるような性教育」が今後めざすべき性教育であるとした。また、安易な性交を減少させるような「行動変容」を目標とした教育を確立させるため、予防行動理論のモデルの上に

立った教育内容を構成する必要を述べている。

楠本らは、米国の性意識の変遷を振り返り、日本の今後の性教育の方向性を検討した。米国では戦後、性解放に対応した性教育が優勢を占めており、快楽主義が拡大する中で、10代少女の妊娠が増加し、中学・高校中退者の増加、性感染症の蔓延、離婚・未婚の母の増加等の社会問題が発生し、また、家庭の崩壊や養育機能の低下をもたらしたとされる。90年代以降は、エイズの流行や経済不況などの時代背景の中で、性の精神面（愛、思いやり、エイズ患者との共存）などを重視した教育へと変わっていった。米国ではゆきすぎた性解放による反省から人権尊重と異性に対する思いやりを育む方向へと性意識が変化している。若者の性の自由化やエイズ感染症の増加が進む日本は、アメリカの新しい性教育が受け入れられた意義を理解し、性教育の方向性を検討する時期であると指摘している。

梶原は高等学校の家庭科教育から「性教育」が排除された理由を明らかにするための研究を行った（梶原, 2003）。80年代以降高校の家庭科教育で展開された性教育では、高校生の段階から「性的自立」「性的自己決定」の必要性が語られ、性に関して生理的、解剖学的、精神的、心理・社会的側面から「性」を学ぶことが意図された。しかし、「性的自己決定能力をつけることが望ましい」とする立場に立った教育は独自の解釈をもたらし、援助交際においても「誰にも迷惑をかけていない」「双方で合意しているのなら売っても構わないのではないか」といった、自己中心的な性行動を生み出していった。このような言動への対応策が論じられる中明らかにさらたことは、「援助交際」の問題性の提示においては、教育論や道徳論に還元するのではなく、「性」を市場経済に載せて金銭で売買することについて考えさせることの重要性である。これは「性教育」を教育や道徳の範囲に留め、その中で語っていくことが不可能になってきたことを示している。このような事態の発生により、文科省は家庭科で「性教育」を取り扱うことは不適切であると判断し、2000年の学習指導要領では保健体育のみでの取り扱いが決定した。梶原は、文科省が「性教育」からイデオロギーを排除し、解

剖学的、生理学的にのみ扱うことが適切であると判断したと考えられると述べている。今日、若者に対して「性」を提示する場合、それが様々な社会的状況と複雑かつ重層的に絡んだ事柄であるがゆえに、より多面的な領域からのアプローチが必要になったといえる、と梶原は指摘している。

杉山の研究は、高等学校における同性愛者の性的自己形成過程を、先行研究の検討と当事者への聞き取り調査を中心に分析し、そこからもたらされる諸問題を検討することを通して、すべての高校生の性的気付きと性的自己肯定を促すセクシュアリティ教育を提起することを目的に行われた(杉山, 2006)。杉山は、ゲイスタディーズによる教育学、教育社会学の先行研究がとても少ないこと、教育分野における同性愛研究は、同性愛を性非行として扱うことが出発点となっており、いかに非行から遠ざけるかに集約されていることを指摘している。また、高等学校での性愛や恋愛に関する学習事項はすべて異性愛が中心であり、教師の無意識・無自覚な生徒への働きかけや学校文化、男子優先の慣習などは、生徒の価値観の形成に影響を与え、同性愛が議論に上った時に否定的な文脈で語られることなどにより、否定され排除されていることを指摘している。このような状況における同性愛の高校生の自己形成過程には、①自己受容の困難、②自己イメージ形成の困難、③情報アクセスの困難、④自己開示・人間関係づくりの困難、⑤事故回避の困難、の5つの困難があることが示された。この内、同性愛の高校生が強く訴えた困難は情報へのアクセスと(同じ性的志向をもつ人たちとの)出会いであった。同性愛の高校生は、性的自己形成に不可欠である情報へのアクセスを学校外部にしか求めることができないため、性的自己決定において情報選択が適切に行われにくいという問題が提起された。教育的なアプローチとして、すべての生徒に等しく情報アクセスを保障し、幸福の追求につながる性的自己決定能力を育成することが必要であることは言うまでもなく、同性愛の高校生にも性的自己決定能力育成のための包括的セクシュアリティ教育が不可欠であると述べられている。

V. 考察

前稿(西頭他, 2011)で報告した保健領域における文献検討では、実態調査と方法論について論じているものが中心であったが、今回は、性意識・性行動の背景にあるもの、それを形成してきたもの、形成するものに焦点を当て、必要な性教育の方向性を論じているものが目立った。若者の性の実態を行動からのみ捉えるのではなく、社会背景や精神状態、生活習慣(喫煙、飲酒)、親の性意識等の視点から捉えることで、セクシュアリティ教育におけるアプローチの多様性が示された。以下に、「若者の性意識・性行動の現状と課題」と「セクシュアリティ教育の方向性」について考察する。

1. 若者の性意識・性行動の現状と課題

筆者は前稿(西頭他, 2011)にて、若者の性意識・性行動の現状と日本において実施されている主要なセクシュアリティ教育の現状を保健領域の文献検討によって明らかにした。その結果から、若者の性意識・性行動には、「性行動の場面において女子は受け身であり、性交の意思決定においても自然の成り行きで自分の意思決定に基づいておらず、男性優位の男女関係の構造が窺えること」「男子は性行動への興味や関心は高いが避妊や性感染症等への意識は低く、性行動に伴うリスク対処への意識が低いこと」「若者の性行動の場面では避妊や性感染症の知識をある程度もっていても避妊の実行には結び付いていないこと」等の特徴があることを示した。今回の文献検討の結果からも、同様の傾向が窺われた。加えて、男女ともに性交に対するハードルが低いこと、性交経験者が避妊を実行している割合は比較的高い割合であるが、確実な避妊行動が行われている訳ではない現状が示された。また、性交経験における不安は、男女ともに「妊娠」の割合が高く、「性感染症」を自らの問題として捉える意識が低いことも示唆された。避妊の実行においても避妊方法の選択においても、男性の意思がより強く影響していることが山根らの調査から指摘されており(山根他, 2000)、また、性交時に気になる不安や心配事に関して十分に話し合われていない傾向にあることが土井らによって明ら

かにされた(土井他, 2008)。これらのことから、若者の性意識・性行動における課題として、男女ともに安易に性交を行っており、特に女性においては意思決定がなされておらず、性交に関する不安や心配事を感じているにも関わらず、話し合える関係性が築けていないことが挙げられる。

高校生の性行動・性意識を生活感情や人間関係の視点から検討した研究では(施, 2003)、日常生活の退屈さや将来への不安が性交経験に影響しており、また、家庭・友人・授業が楽しくないと思う者が方が日常生活の退屈感・徒労感等が強い傾向にあることも指摘された。性的逸脱行動としての『援助交際』の背景要因を明らかにした櫻庭らの研究は(櫻庭他, 2001)、若者が、寂しさを紛らわせるため他者との関わりを求める傾向や流行に追従する意識、金銭を最優先に考える傾向、自分以外への関心の欠如等、現代青年に特徴的とされる心性が『援助交際』に大きく関与していることを明らかにした。これらの結果からは、若者の性における課題が、日常生活やそれを取り巻く人間関係、現代青年の持つ心性など、あらゆる方面における因子によって作られていることが示されている。このことは、セクシュアリティ教育が性に関する事だけに特化するものではなく、包括的な教育として構築されることの必要性を強く示すものである。

また、家庭における性教育について、父母は学校と同じ程度に家庭でも性教育が必要であると考えており、その内容において、学校と家庭の役割の違いと連携を意識しているといえることが示された(高橋, 2003)。前稿(西頭他, 2011)において筆者は、セクシュアリティ教育が乳幼児期から段階的に積み上げて実施される必要性について述べたが、この高橋の結果から、その実現可能性が示された。父母において、家庭と学校が連携してセクシュアリティ教育が行えるような準備が整いつつあると考えられ、それは、親の性教育の必要性への意識を高めるような働きかけや夫婦間のコミュニケーションが促進されることにより、さらに高められることが示唆された。

2. セクシュアリティ教育の方向性

梶原は、高等学校家庭科から「性教育」が全面排除された理由に関する考察において、「性教育」を、従来までのように教育や道德の範囲に留め、その中で語っていくことが不可能になってきた、との見解を示した(梶原, 2003)。「性」が様々な社会的状況と複雑かつ重層的に絡んだ事柄であるがゆえに、より多面的な領域からのアプローチが必要になったことを、梶原は指摘している。

その他の文献からも、若者の性意識・性行動を捉えよときの多様な視点(生活感情、家庭や友人との人間関係、現代青年に特徴とされる心性、親の性意識、同性愛者の性的自己形成過程等)が示されており、「性」が社会的状況と相互に影響するもので、深く絡みあっていることから、「性」をあつかうセクシュアリティ教育も多角的な視点を持って構築されることが求められることが示されている。特に、同性愛者の学生に対する等しいセクシュアリティ教育の実現は、幸福追求に対する権利であり、決して否定・排除されるべきでなく、また、性的自立が、自分と他者(異性または同性)との相互の基本的人権の尊重という視点に立ち、他者との自由で平等な関係性を求めていくと同時に、自己のセクシュアリティを自主的に選択していくことであるならば(池谷, 2007)、これはすべての子どもたちの性的自立において必要なことである。

また、今野は、調査結果から大学生の性行動の問題点として、①安易な性交、と②不確実な避妊、の2点を明らかにし、これらの問題点から、性教育において性交の意義、性交が互いに及ぼす影響、またコミュニケーションの手段として、人間関係づくりのひとつとしての性、すなわち「ふれあいの性」について重点をおいて教える必要があるとした(今野, 2003)。

梶原は、高等学校家庭科から「性教育」が全面排除された理由について、当時の文科省は「(性教育から)イデオロギーを排除して解剖学的、生理学的にのみ扱うことが適切であるとし、2000年の学習指導要領では保健体育のみでの取り扱いが決定されたと考えられる」と考察しているが、今回の文献検討の

結果からは性教育が「解剖学的」「生理学的」な枠内で行われる狭義の性教育ではおさまらない、多面的なアプローチを必要としているものであることが示されていると言える。

VI. まとめ

セクシュアリティ教育には、多面的なアプローチが必要であることが示されたが、どの視点に立ってみても、現在の若者の性の状況に対する認識は同様であり、同じ方向性を持っていることも確認された。各分野におけるアプローチの方法を知り、考えを総合的に教育に取り込んでいくこと、また他分野と連携して性教育を実施していくことで、実状にあったより包括的なセクシュアリティ教育を構築することが可能になると考える。

文献

- 土井豊,伊藤常久(2008):大学生における性意識・性行動の実態、及びこれらに影響を及ぼす心理・社会的要因に関する調査研究,東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要,39,99-102.
- 池谷壽夫(2007):新装版セクシュアリティと性教育(新装版),青木書店,東京.
- 今野洋子(2003a):大学生の避妊に関する意識・行動に関する報告—A大学の学生を対象とした調査報告—,人間福祉研究,6,101-106.
- 今野洋子,佐々木浩子(2003b):大学生の性意識・性行動に関する報告—A大学の学生を対象とした調査報告—,北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要『生涯学習研究と実践』,4,191-204.
- 梶原公子(2003):高等学校家庭科の「性教育」—学習指導要領からの全面削除をめぐって—,社会学研究年報,10,41-50.
- 河野美江,西村覚,荒川長巳(2009):大学1年生におけ

- る精神的健康状態—喫煙・飲酒・性行動との関連—,島根大学教育学部紀要(教育科学),43,41-45.
- 楠本久美子,江原悦子,岡田潔(2005):米国の性意識、性行動及び性教育の動向と我が国の課題,四天王寺国際仏教大学紀要,大学院(4),人文社会学部(39),短期大学部(47),157-162.
- 西頭知子,佐々木くみ子(2011):日本の若者の性とセクシュアリティ教育の現状に関する文献検討,大阪医科大学看護研究雑誌,1,34-42.
- 櫻庭隆浩,松井豊,福富護他4名(2001):女子高生における『援助交際』の背景要因,教育心理学研究,49,167-174.
- 施利平(2003):高校生の性意識・性行動に関する調査研究—高校生の生活感情や彼らを取り囲む人間関係との関連から—,21世紀ヒューマンケア研究機構研究年報,9,91-99.
- 杉山貴士(2006):性的違和を抱える高校生の自己形成過程—学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から—,横浜国立大学技術マネジメント研究学会,5,67-79.
- 田原歩美(2010):性的自己決定と性経験の関連性について,福山大学こころの健康相談室紀要,4,59-66.
- 高橋久美子(2003):親の性意識が性教育に及ぼす影響—父親と母親のセックス観をもとに—,日本家政学会誌,54(1),59-67.
- 山根真理,関野幸恵(2000):大学生とその親、教員の性行動と性意識に関する研究—愛知県データのグループ、男女別クロス分析結果から—,愛知教育大学研究報告,49(人文・社会科学編),181-188.
- 山崎早苗,長野成美(2010):大学生の性意識と性行動に関する調査—A大学とB短期大学の学生を対象として—,吉備国際大学短期大学部研究紀要,39,13-26.